慶安
両度
大坂軍記
全

特60
155

092349-000-7

特60-155

大坂軍記

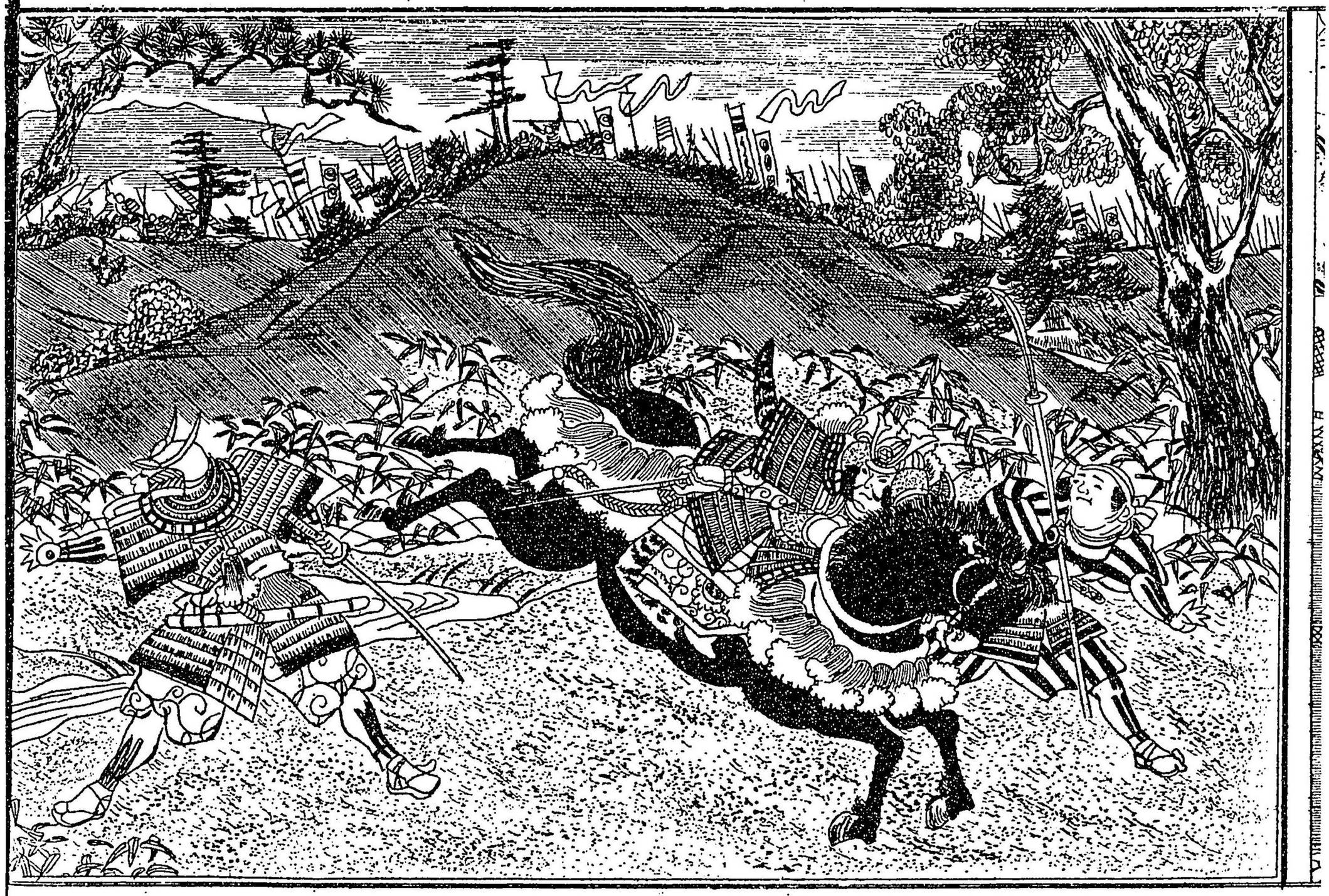
村山　銀次郎／刊

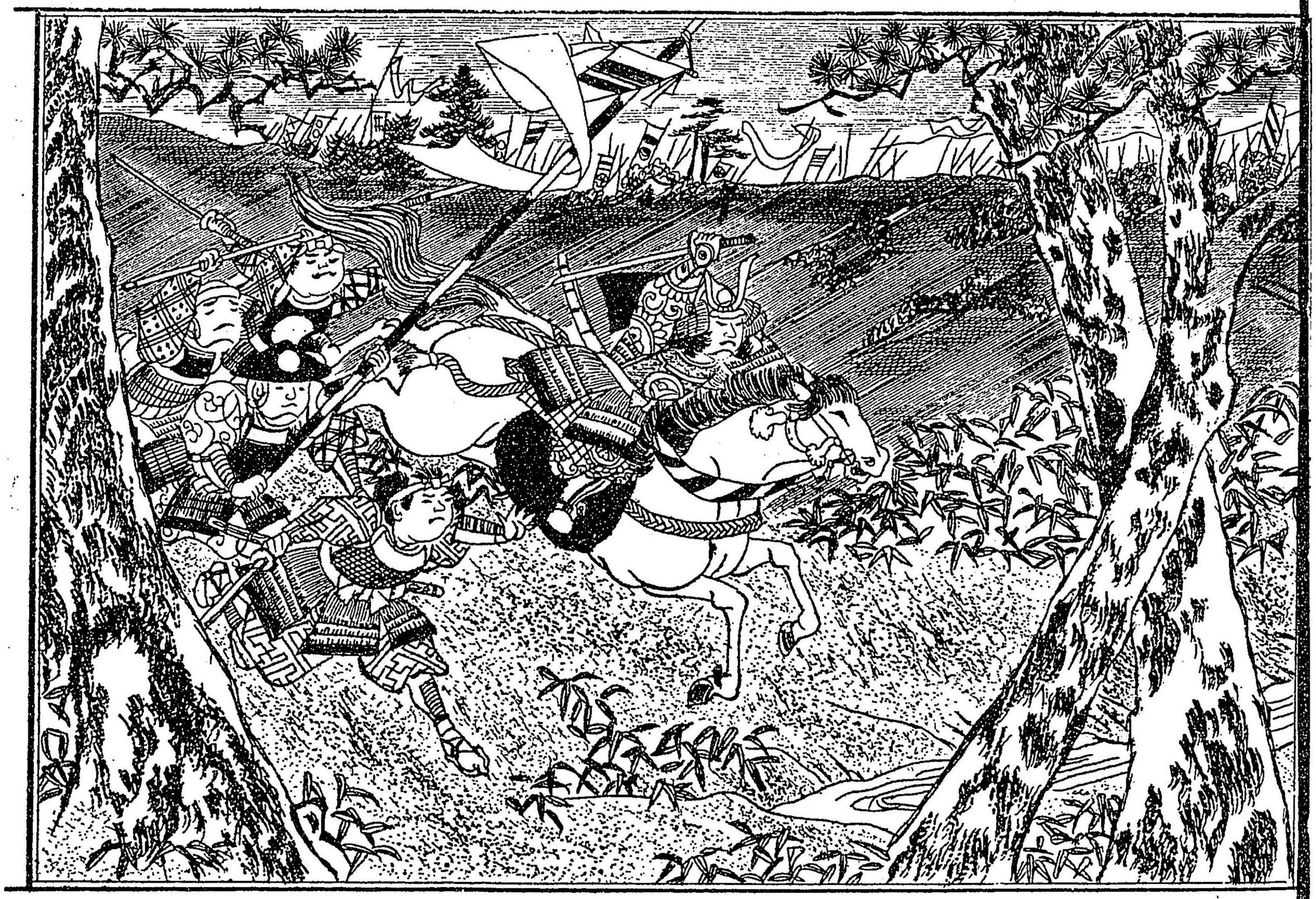
M21

DBP-1938

特60
155

慶長十九年甲寅の冬正二位右大臣豊臣秀頼公ハ大坂の名城ふて信州上田前の城主眞田安房守が二男左衛門佐幸村を軍師とるし徳川の軍勢百三十八万の大軍をひき受篭城ふ及ぶ幸村出丸を築き諸将を集めそれく軍配を定め専ら防戦の用意のひけり茲ふ東軍の大将ふ中村右近山田織部ハ家康公の命ふ今日穢多が寄の戦ひふて敵油断あるべしとて両将へ軍勢を子へ押寄さる時ふ薄田隼人ハ砦ふ平子主膳を置三百騎にて守らせ其身ハ二百人を引て砦を出て伏勢とるり待居さるふ中村山田ハひそうふ押寄ときの声をもあ





木村長門守
徳川江
使節ノ圖

げび平責ふせんと手配して乗り入らんとせるふ平子主膳ハ十分ふ敵を引受け鉄炮を打つくるふ中村右近山田織部の両人駆きて下知せる所へ薄田隼人兼相ハ白糸おどしの鎧ふ赤ら星の兜を着てゐがき七尺の金採配を持て四角八方ふ打てまろる中村右近山田織部も既ふ危くくられハ岩上長八等七人討死してられをそくひけるられ真田幸安ガ謀ありと薄田平子ハ大助ガ智謀をくんしけるる茲ふ城ガさの大将矢野和泉の守幸村ガ軍配ふて鳴野口をうさめけるふある時軍兵ともハ焼火をして居りけるを佐竹右京大夫ガ軍卒等このあり姿をて早速老臣の渋江内膳へ訴へけるふ内膳則行くるふ敵の守り油断ふれハ此むゑ主人右京大夫へうくと告るられふ依て佐竹勢ハ堤を飛下り

一度ふあらられ鉄炮を打るくるふ矢野ガ勢ハ思ひも寄さるとられを大きふあハてくる所ふ和泉守打て出ふせだ戦ふふ渋江もせ入り矢野ガ勢ふあるとりけれバ崩れ立て敗北ス和泉守今ハ遁れぬ所と思ひ敵数多を討つひふ討死をるしける時ふ城方ふハ木村ガ初陣を見物せんと秀頼公淀殿鳴野口の櫓ふ

のぞり給ふて其働きを覽有て大ひに賞しさまふが時に家康公ハ茶臼山に陣有り然るに外より告て只今秀頼公擔へ上りさまふよしを言上に家康公のさまふハ先日蜂須賀奪ひ取さる三メ目筒にて矢倉を打崩べしと言さまふを片桐市正より密書を長門守ふよせて忠をあらハし重成ハ是を聞駈入櫓を下さまへといふに皆くおどろき下りまふ所へ真田大助駈来り父幸村申ハ今日不吉の気顕れハ櫓を下し奉れと去時に寸五六間も退さまふに大地も崩る計りにて櫓一重を打けるに皆く身ふるいして恐れのひろう爰に伯樂ケ淵の砦を薄田隼人平子主膳の両将守りける所へ織田有樂斎の中の島の砦より隼人を招ぎにふして行しが余り帰りのかそき故平子ハ迎ひに行さるを石川

主殿頭が勢大雨をも恐れず攻来り両将留守故安くと砦を援さるとこの夢にも知ず平子ハ砦心元なしとて帰りける石川が勢入替れば主膳怒れども せんなく引へさんとせるを池田家の水天治太夫と云者甲冑を着し堤の下に休るが平子ハさぐ一騎うけ来るを治太夫見るより鎗をもつて馬の足

をるゞたれども逆さまを落ける所を討とり首をあげさせり関東方ハ藤堂和泉守の軍勢一番ハ出丸へ押寄るや城へ乗入と塀へ取付登らんとをるを城中より紙玉込なる鉄炮を打うけるハ玉ハ火のうちつけ付落を見て一所ハ塀へ取付寄手の面〻早城へのり越んと各一番乗とよばもうけるハ城内より長刀ハて腕を切り落し亦取付あうれハうれも切々るハ腕ハ屋根ハ大根を千切る如くにハ人おりる家康うハ井楼ハて見物ありさまハハきりふるひ出させ楼を下のハハ城中より楼上を目がけ大炮を打掛さるハた運強くもこの難を道れのハ東軍大ひハ恐れ敗北ハし諸将もあるゝ皆歩行立ハて土手の内へ迯入けり敗兵ハし合ハこ合殺さるゝ者数多〻ゞ人皆四ツをいハ成時ハ出丸ゝ小筒の面

めん槍出し打入玉一ツハて二三人打殺し死人ハ積て山のごとし是ミる幸村が謀計ハ当りて

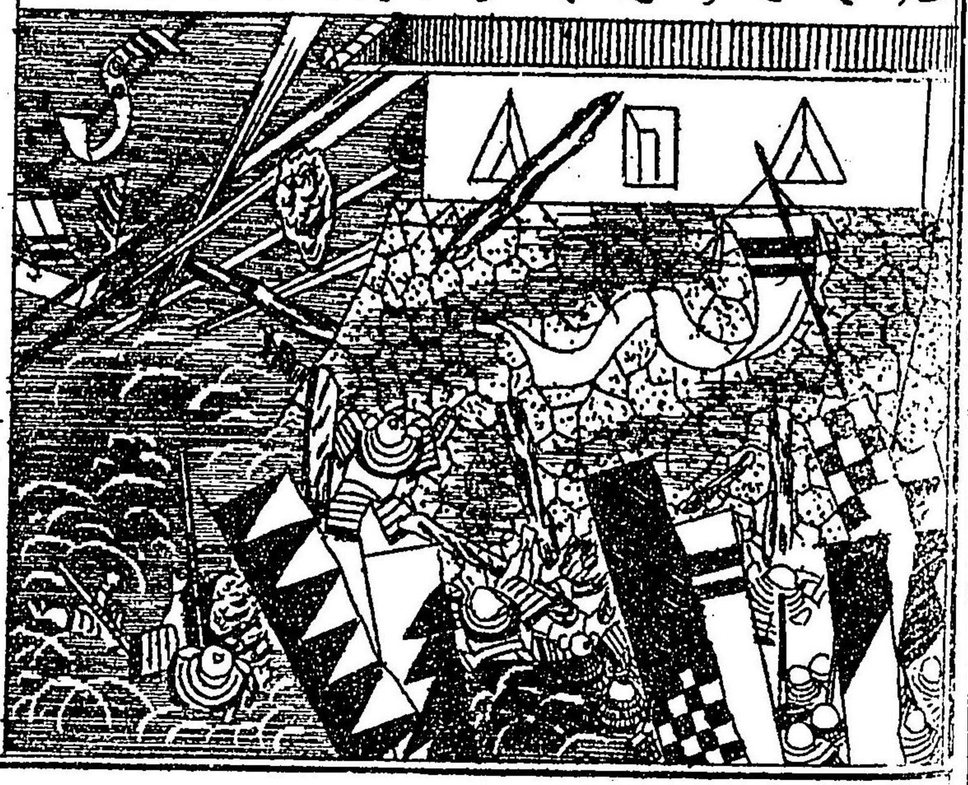
るゝ幸村が一子大助幸安ハ父の命を守り軍勢を進めて加賀陸奥酒井藤堂本多等の備を四方八方へ突崩し老臣穴山小助三輪琴之助を左右として丸備ハて榊原が陣を敗崩し上杉佐竹堀尾京極勢を追散して家

康公の本陣へ打入公を見がけて追うくる旗本の面くふくと止まりて防ぎ戦ふをとこと共せどに突くづしけるふ七拾五人枕を並べ討死るし家康公大きふおどろき逃のふと馬て飛して追うくる爰ふて討死もる者十二人既ふ君も危き所へ真田河内守兄弟走り来りて戦ひけるふ城兵乱れんとも幸安も危き所へ穴山小助走り来り防ぐふ気を得て志ぢらく戦ひ双方軍勢をおさめ引取ける茶臼山より家康公ハ住吉の方へ乗物ふて出さまふふ旗本三百人前後を守り行けるふ勝間の方ふ埋伏したる城兵とおぼしきどろと作りて六文銭の旗をむらやうし真田幸村是まあうと呼ろうけれど東軍大ひふ駆たるも伏勢とうろさえ防んともる者一人ももるとうくの如き幸村五人あり同じ出立ふく所々ふあら

ふれ攻けるか幸村の計略ふこ今ハ家康公もむざう武者とあうのふを幸村もるふ見付鎗を引さげ追うけうしが家康公の行え更ふ見人に幸村ふ一ぢふ思ひ我形道具を以て討取るハ中もりれ共今日ふも限らじとて引上うう叔家康公ハ城中ふむわん或ハ返忠の者有ぢしと矢数を射させのふふ星

合口の番頭南條中務大輔保谷口の番頭牧島玄蕃允両人彼天狗を持来り幸村ゐ見せけるゐ幸村矢文ゐ付謀ごとをるさんと則南條牧島に似さる罪人の首を切て獄門ゐゃけ両人の子ゐ謀を命し歃陣へ遣しおき中務玄蕃返忠の罪ゐ因て斯のごとしと書付さう東軍これを見て家康公へ言上ゑ公聞召て則南條為之助牧島源吾を召し出し汝らが父昨夜城内ゐて討れたり実の道ゐ見て参れと云二人の者ハ獄門を見て幸村が授さる通り邪智深き大将察しのハんとをもう爰を忠の道と思ひ両人腹を切て死ゐたりる家康公是を耳て泪を流しのひて不便の事ゐりと宣ふ城内ゐくへ之をゑくあらら勇士を矢るひしと中務玄蕃を初め皆て泪を流しける徳川家康公ハ幸村が計略ゐ当りゐのふて供奉の

旗本追て所てゐて討死あしけれバ只一人危きを道を歩立て走りてまふ幸村跡を追て来り公も今ハ道をぬ所と思ひけるゐ桶屋某を頼てしゐ某の気の毒ゐ思ひ公を桶の中へ隠しる幸村尋来り桶やゐ問共知ぬていゐあいさつ色されバ幸村其侭て帰りけるゐ東軍所へ逃去て討る者数ゐれば



大将の行衛も定まらざりしいよ〳〵敗北ふ及ひ新将軍秀忠公も大ふ駭き諸大将籏本へ申付諸方へ別れ公の行衛を尋ぬけ共共更ふ知れぬ其処へ彼の桶やの弟公の坐所を注進ふける秀忠公初め諸将安堵の思ひとゐし

ふ〻る直御迎ひを出し御帰陣あり城方ふハ今霄蜂須の陣へ夜討をゐさんと夫〻手配ゐし阿波の陣ふハ稲田九郎兵衛今夜陣番ゐり城方追々押寄けるふ皆〻駭ろきあとてける稲田ハ大剛の勇士ふて少しも恐れず者共出よと呼り〻馳出る城兵関を作りて切て廻るを稲田ハ七八人切り伏戦ひける茲ふ徳川両将軍ハ大軍を以て慶長十九年の冬大城城を攻〻るふ真田ら謀計ふ当り大ひふ敗北をゐし京師を取繕ひ勅命を以て和睦を結びしが明れハ元和元年夏ふ至り約を違ひ戦ひ

ふ及びけり関東約をたがへらるふ因て淀殿ハ諸将を集め去冬中井大和守角の櫓を打しを返も〻も不届ありとて大野主馬を大将としく軍を出し次将ふハ塙團右エ門岡部大学米田監物を添られ法隆寺へ向へしと打立せけり既ふ法隆寺ふ至りて中井が宅へ押寄けるふ大和守ハ是を聞先ふ都へ逃け

ゆへ手ゐ合ものゐし因て宅へ火をうけるゐ植村主膳等ハ火の手を見て是を焼してハ叶ましど一度ゐ寄来り大坂勢を中ゐ取込攻けるゐ此大勢ゐゐゆまきされ既ゐ崩んともる所へ岡部横合より鉄炮を打うけ追散し鎗を取て突入右ゐあゐり左ゐ支へ前ゐ拂ひ後を切て戦ひ大和勢浮あしゐ成ける所へ墻ゐ後ゐりゐみ立けるゐ岡部力を得て敵を八方へ追散し恰も狼の群犬ゐ入し如く爰ゐ大坂勢ハ南方を攻んと打立樫井まで寄来るゐ浅野但馬守ゐ先陣上田主水亀田大隅二千の兵ゐ備へけるゐ上田ハ先ゐ進んて切入しを墻圍右工門百五十の勢ゐて八方へ突崩しけるゐ墻ゐ手下ゐて坂田庄三郎と云者あり八角の棒ゐて当るを幸ひゐ立れバ是ゐ爲ゐ討ゐ者数ゐれバ此坂田ハ上田

ゐ兜付太刀を以て切り結ふ両人馬上ゐて引組両馬ゐ合ゐ落て坂田上ゐ成り上田を組ゐ伏るゐり主水ゐ郎等横関平右工門をゐさゐ突ゐるを鎗打落し是も膝の下ゐ引ゐれを見て関平内切てゐるをゐれも刀を落ゐ引ゐるゐ所を関屋新之助突てゐる右の手ゐて関屋ゐ鎗を打落さんとゐる所ゐ小

川新助ハ鉄炮まて覗ひ因て打倒をさしもの坂田庄三郎もくれて忽ち死けるを小川新助其首を討取主人を救ひくるゝ塙團三郎直之ハ目の前ゝ愛士を討れ夜叉のあれくる如く右往左往ゝ打ケ散らす亀田大隅ハ多く兵を打せ散乱し塙ハ敵を遣分追るやまし引上味方をうへ見れバうづゝ十五六人に討るされ当敵を追うくるゝ亀田ハとつて返し両将火花を散もて戦ひいづれもかとらぬ剛の者ゝれバうけ流し突るうし引組て爭ふゝどゝ亀田ハ既ゝ危うくくゝけるゝ浅野が先陣上田主水が嫡男同苗勝吉押来つゝ鉄炮を打うけけるゝ憐む間し團右工門ゝ咽どを打ぬゝれて樫井川へ落流れ行残兵皆くゝれを見ゝ敵陣へ切入て討死に岡部大学ゝれをゝて軍ハ是までゝりと同く敵中へ討

て出四角八方へうけ散し其身も深手を負けれハ川へ飛込團右工門くゝと呼とゝゝとゝゝえゝりと塙氏死出三途を供せんと腹うを切ゝ死ゝけり米田監物ハうく軍兵多く損して真田殿へ申訳ゝしと塙岡部の吊ひ軍して名を末代に止めんと引返し岸の和田の勢へ切り入り敵十二騎を突伏其身も腹十文

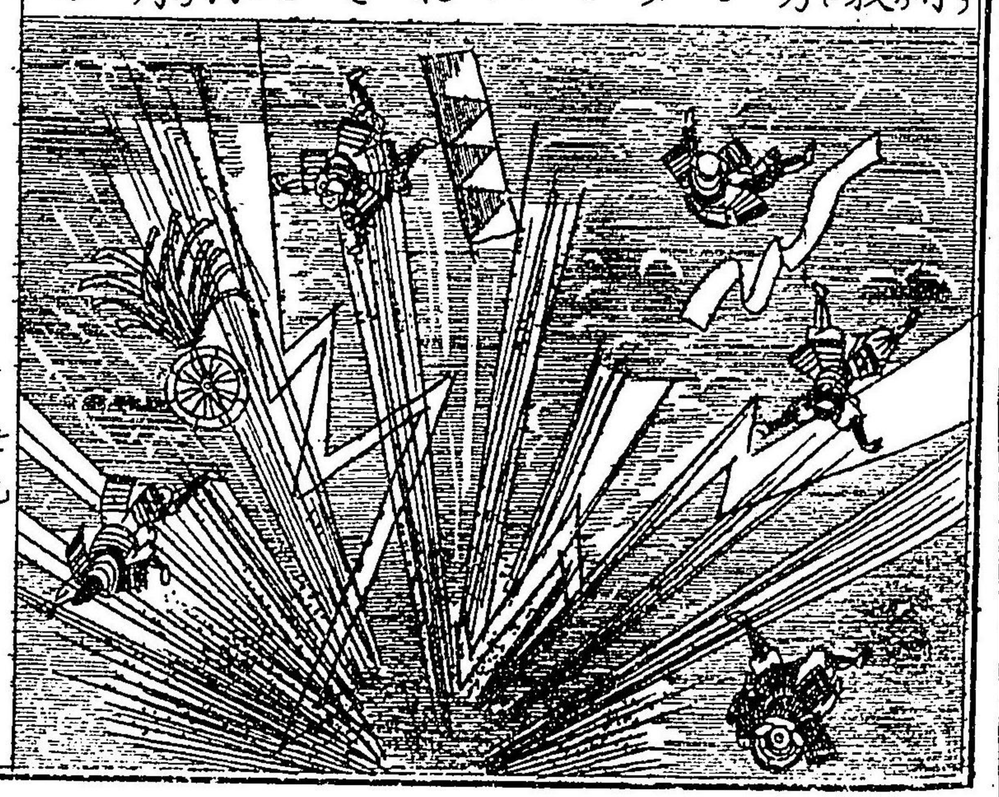
字ゐ切て死ゐける長曽我部宮内少輔元親ハ十三峠志貴山ゐて夫く用意ゐ及びける関東方戸沢相馬以下の先陣十三峠より押寄さる所ハ尾地藏堂を後ゐ敵を引くく小勢る一戦ゐ駈散せとおゐえさけんぐ進行くを横合より長曽我部右卫門太郎ハ大炮を打放せバ諸勢ハ大紀ゐ騒ぎ中ゐも相馬周防守ハ馬の頭をうゝれ其身落馬をるしけるゐ右卫門太郎ハ采配を打ふりかゝもと大ひゐをげまし鉄炮を打ゝけけれバ敵勢右ゝ左往ゐ敗北を二陣の藤堂ハ之をうてらいくち惜と崩れくて山下まで引退くを元親惣軍を下知して攻立られぐ峠ゐも苗まるを叶ぐ小泉迫平崩れとるゝて引きゝる時ゐ五月朔日井伊掃部頭諸軍をそゝへ若江機瀬川の東ゐ押寄るゐ其日ハ暮く明るバ二日の早天ゐ大坂方の大将木村長門守重成ハ井伊掃部頭の陣屋へ飛入掃部頭と勝負を決せんともを廻る名ある者共ゝけつてられ木村ゐゐ討るゝ者七八人めゐ掃部頭ゐ重成ハ言葉を掛我ハ宇多天皇の末流るゝ汝ハ頼政の臣猪の早太ゝ後胤るゝ敵ゐ取不足るれ共汝バ東三十三ケ國の簇頭某ゐ追立られ毎度の敗軍敵ゐ後

を見せる法やある尋常の勝負あれと突て入掃部頭も鎗を合せ既に危ら紀所へ藤田能登守走り来て戦ひけるに井伊ハ落のびらう重成怒り藤田を突殺しくろる家康公ハ道明寺に本陣を召れ亀井村平野休を見積りあらんと御出馬あらしを幸村これを聞大ひに悦び五ゝ所に伏勢をろまへけう公ハ斯とも考ふに平野に入けもくばさてハ幸村城内へ退しるらんと思ひしに亀井村の後ろよりおめいて出くりけれバさてハ伏勢を旗本の面く防き戦ふ公ハ平の権現の森へ逃込めふ此時旗本十八人討死をこれを亀井の十八級と言幸村公の本へ逃込めふを見付馬を飛せてそれへ逃めふハ徳川殿と見奉る真田左工門佐ハ供せんと其間近く駈寄鎗をあけてをらいらせんとをる時俄に真黒に成く先ハ忍くに

おハむらんと四方を鎗ふてつけども手ごゝろ
るくためらひしが馬鳴
をるの法心付馬の声を
たろくふ突くるふ大将
ハ道落行めふ家康公ハ
平野の町中へ入て辻堂
の有くれバくふ陣を
取りて先陣のゆくをを
聞合せ然るふ此堂ふ地
蔵尊あれバとて藪うげ
へ小便ふ参るべしとて
大久保彦右工門等附添

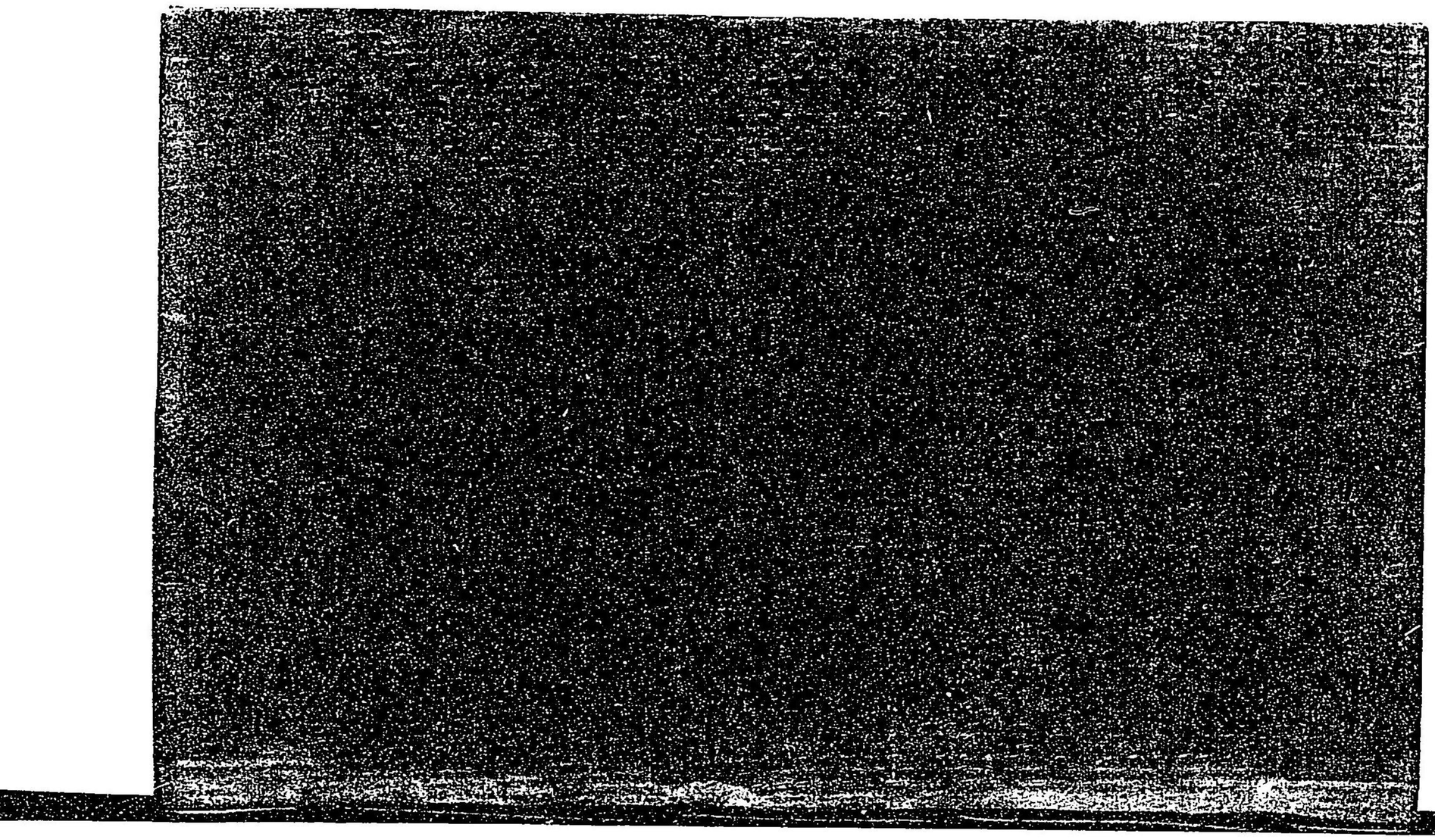
けるゐ此時恐ろしや大地もひゞき渡り百千の雷地より出る如く真黒ゐ成て地藏堂ハ飛あらりけり家康公ハのつけゐ支ゑれハ大久保ハ恐れゐゞらも公をハ小服ゐもさゝ東をさして逃んとも時ゐ飛竜火空中を舞て火をふらしけれハ大久保ハ大溝へ飛込公ゐ泥をぬり已れもぬりてさけゝ五月三日新将軍秀忠公ハ道明寺ゐかゐゝ家康公へ會陣あるべしとて可村迫来りさゐゐゐ爰ゐ真田の影武者の七勇士ハ左右七ケ所より鉄炮を打ゐけるゐ諸将駭きさゝゐる所ゐ六文銭の旗を立切り入り声ゝゐ真田左卫門佐幸村天運を計り知り落城を見ざる先ゐ討死せゝ新将軍ゐ對面ぜんとて穴山小助ハ本陣ゐふゝゝ残り六将ハ諸将の陣ゐ切て入るこのきゝゝきゐ穴山ハ将軍の馬近く進ゝ来る

を長岡八九郎馳来り打合ゐを八九郎をハ突殺し大音上ゐ真田幸村秀忠公へ見参〳〵と飛来り将軍既ゐ危き所へ本多出雲守馳来り大音上それゐハ真田殿ゐてハゐきや勝負〳〵と呼ゝれバ三浦木村らゐ戦ゐさせゐ父も将軍を追行ども見人ゐゝゝゝ今ハ六将も一ツゐ成て小高き所ゐ火をあけゐせ大音ゐ



申けるハ真田幸村うけ武者共腹を切りて今ハうれまでありと呼ハり死けりうゝ後藤又兵卫基次ハ四月廿八日の夜國府の戦場をのがれ行熊野新宮左馬之助ゟ告て國松君并ゟ御母堂の侍供して今晩泉州半田寺ゟ着しけるゞ家康公ハ危難をのがれ死人の乗輿ゟ召れ和泉地ゟ落させ半田寺山ゟ入ゟ侍供のめんゝも打破りて道れんと左馬之助ゟ御母君を守らせ自分ハ國松君を母衣の内ゟ入せ侍ひて走ろうとうゝゟ鎗ゟつとりて手ぞゆく突て馳廻りしゟ七八人を突おとし輿の内へ鎗をつゝ込入けれバ公の股をぬゝく突けるゟ

ぞ大久保彦左卫門ゟ鎗の柄を切りゝれくゟ二間程下へおとしけるゟ供のめんゝ飛さがりて戦ふ基次ハ家康公とハゟらばゝく若君をいじと駈通りけるを追敵をうちゟせ切りさて打通り城中へとそハいそゞけり木村長門守ハ右大臣秀頼公のゟ身ゞハりとるゝて井伊本多酒井ゟの諸軍と戦ひ

鎗を入れておひくづしたまへ池田藤堂とたゝうひこれを突くづしゝゝ敵勢大坂右府公の強氣なるゝとハ太閤の如しさそもゝ大勇なるとこゝろかそれゝんじける既ハ大坂の御運つゝ落城の際太閤の御代より奉仕志しゝる木村常陸之介の妻女長門守重成の母さりし宮内の局ハ重成の出陣をいさぎよくさせ其身ハ直ハ淀君ハ見へ御自害をゝゝゝ其坐を去ぢ斯あるべバせと自害せり其勇烈ハもげまされ淀殿をもじめ附の局ゝゝ自害せり之宮内局ハ烈女故なり家康公も幸村の古今不思議の軍略ハ屢くは危難ありしゝ法運つよく勝利を得さまひ大坂落城ハいさりしゝハそれゝ諸将へ恩賞をゝゝゝ目出度御帰陣ありゝゝ

明治二十一年九月二十日 印刷
同 年十月十六日 発行
著作兼発行者 日本橋区馬喰町三丁目十八番地 村山銀次郎
印刷兼発行者